本多猊下の三大名著

法華經要義

四六判　六百數十頁
總振假名付
定價　金參圓

法華經の教義を整束し極めて平易懇切に講述せられ、今回特に眼天覽、供臺覽、空前の好著なり。

日蓮主義の心髓

四六判三百五十餘頁
總振假名付
定價　金壹圓八十錢

法華經要義の姉妹篇なり、日蓮主義の精髓を領得せんと欲する者の必須缺くべからざる良書なり。

日蓮主義精要

四六判　七百餘頁
總振假名付
定價　金參圓五十錢

十二篇に分類し教義信條の整束歸結を懇說せるもの、誰人にも易々として理解の金鍵を與へらる、空前の指針、大燈明の賞讃あり。

「教」發行所

統一定價	
一冊	金貳拾錢　送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢　送料共前金之事
一ヶ年	金貳圓貳拾錢　送料共

統一廣告料	
表紙一頁	金貳拾圓前金之事
一頁	金拾五圓
半頁	金九圓
四分一頁	金五圓

昭和五年一月廿四日印刷納本
昭和五年二月一日發行（第四百十九號）

神奈川縣橫濱市磯子區磯子町廣地一四八
編輯兼發行人　磯部滿事
印刷人　鈴木日雄
東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地
印刷所　都印刷所
電話高輪六〇二四番
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　統一發行所
振替東京五一〇七一番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

不許複製

目次

本佛の力……本多日生
先づ心を救へ……本多日生
天風三萬里紀行（其八）……小林日種
記事……
○國民教養講座案内
○各地教報
○誌料領收

第三十五年三月號

本佛の力

大僧正　本多日生

今の日本に横つて居る樣々なる災害に對し、これを救ふべき方法は多々あらうが、多くは當面の救濟、一時の教化であつて、根本的に日本國民を健全に造り成し、日本の文明を健全に造り成すといふには、どうしてもモウ一つ深い所から考へなければならないと思ふのである。それはすべての文明現象は人の心の投影である、人の心を善くするといふことが根本であるが、その善くするといふに就ては二つの方面があると思ふ。一つは人に善き教を與へ、導きを與へて、正しき觀念、意義有る生活を喜ばしむるやうに、その人々の理想信念を造らなければならないと思ふのである。いま一つはその人々の心の寂寞、煩悶、不滿を救ふが爲に、人々の心に對して強き守護を與へ、大なる救濟を與へて、如何なる人も歡喜に活き、滿足に活きるやうに、即ち救ひを與へなければならない。能く教へ、能く救へば始めて人の心が善き活動を爲すことが出來るのである。救はれざるの心、教へざるの心は、幾ら文句を列べても到底碌な事はしないといふことにならうと思ふのである。

無論さういふ目的からいろ〳〵な社會の施設は行はれて居るのであらうが、政治上の事、産業上の事、多くは皆外部から人々を護るのであり、又教育とか一般教化と言つて居るものは、表面の導きを與へるのであつて、本當に人の心を救ひ、人の心の奥底に打込んだる教にはなつて居ないと思ふのである。そ

れに就てこの人心を教化し、人心を救護するところの強き力は、本佛釋尊より來たるものであるといふことを私は深く認め、且つ信ずる者である。

教といふことを擴げればいろ〳〵の事柄にもなるけれども、眞實徹底したるところの教は、どうしても人々の心に就て、心の本質本體より明かにしなければならない。即ち人間の心そのものゝ實在性を明かにし、その心の內面に具有して居るところの妙體を明かにし、それが如何なる關係に依つて運轉し、如何にして吾々を生じ、如何にして吾々は再生するか、我が心の本質本體は如何なる有樣にして、この永遠久遠と繫がつて居るかといふことを明かに示すことに於て、始めて教の根柢は立つものであると思ふ。その人々の心の行衛がわからない、由つて來たる所がわからない、吾々の生命と言ひ、吾々の魂といふものはどういふ工合のものであるかといふ、この大事な問題を除外して置いて、他の事を教へたのでは、本當の教にはなり得ない。寧ろそれは教でなくして邪見である、外道であると、釋迦如來は仰せられて居るのである。釋迦如來が邪見外道と言はれたのは、ナニも亂暴をしたり、人殺しをしたりする者を言ふのではない、當時の印度にあつたところの哲學でも宗教でも一切を包括して、彼等は即ち邪見外道の輩なりといふことを釋迦如來は斷言されて居るのである。如何なる點に於て邪見外道と言はれたか、一言にして言へば斷見の外道といふものを指して居るのであるが、斷見の外道と言へば魂の問題に就て、今申す魂の始め無く終り無く存在して行くところの不生不滅の眞理を明かにしない、魂が死んで消えてしまふと言つたり、或は魂は一時神に依つて與へられて、都合に依つては取上げられてしまふと言つたり、まご〳〵して居るやうなことは、皆これ邪見外道なりと釋迦如來は斷言されたのである。凡そ佛教の初めの頁より終りに至るまで、釋尊の所說

の正面の敵といふものはその點である。斷見の外道に對して釋迦如來は、人々の心といふものは始めも無く終りも無く存續して行くものなのである、さうしてその心の內面は斯の如くに十界を具足して、善き方面から言へば佛樣の性を具へて居るといふことよりして、人の魂に就ての信念を十分に教へたのが佛教の中心思想である。

ところが儒教に於ても魂といふものはハッキリ教へて居ない。『生を知らず焉んぞ死を知らんや』と言ふから、生れて來る前もわからず、死んだ先もわからず、魂は永存するか、潔た消滅するか、一向ハッキリした事を言はないのである。既に經書にさういふ事を言つて居るのであるから、その後の儒者といふものは、魂の問題などはこれを馬鹿にして掛るやうな態度である。『その問題は自分にはわからぬ』と言つて頭を低げて居るのではない、『生を知らず焉んぞ死を知らんや、そんな事を知るものかい……』といふやうな調子で、恰も今の社會主義者等が魂の事などを嘲つて、『腹が減つたらどうする、魂ナンてそんな舊臭いことは黴が生えて居る……』と言ふのと同じやうな態度である、生を知らず焉んぞ死を知らんや、眼の前の問題さへ解決すれば宜いと言つて、現實の上にのみ道德を說かんとして居るものであつた。又我國に傳はる神ながらの教は、國體を明かにし、國風を擧げる點に於ては無論この上も無い結構な教であるけれども、やはり魂の問題に就てはハッキリしない、『日本國民が死んでどうなる、』『高天原に行く』と言ふ、『高天原はどんな所だ、』『そこ迄言うては困る、そこらにして置いて呉れ』といふやうな譯である。そんな浮ついた事を以て人々の心がハッキリと安心立命せらるべきものではない。靖國神社に忠勇の軍人の魂を祀つた、それは招魂社と言ふから時々お祭りして招べばお出でになると言ふ譯だけれども、お出でになるのは宜いが始終ござる所は

どの邊だ、『御招待した時は九段へお出でになるけれども、御招待せぬ時は何處にござるか、』『そこ迄は言うて呉れるナ……』といふやうな事では、本當に人間の魂を救ひ導くところの教としては不十分だといふことは明瞭な事である。殊に況んや今日の如くに所謂唯物主義であり、無靈魂主義であり、無宗教主義であるといふやうな兇暴な思想が起つて、遂に天下を覆へさんとして居る此の時代の人心に與ふる信念に就ては、到底足らざるものである、その點から言うたならば儒教も神ながらの教も五十歩百歩のやうなもので、皆フラ〳〵して居る、マルクス崇拜者が出て來て『魂の事などはどうでも宜いではないか』と言へば『それもそんなものかイ』といつて引込むやうな譯で、實に思想的に闘ふ力の無いこと夥しいものである。

ところが釋迦牟尼の教であれば、斷見外道といふのが一切の罪惡の根源であるといふことを最初から說くのであるから、マルクスの唯物史觀ナンと言つたところが、それは外道の根本だといふことに就て、徹底的にその頭腦を粉碎してしまふものが釋迦の教である。そこが即ち今日の思想の戰ひの第一線である。吾々としても、人間の魂といふものが眞に消えて無くなるものならば、今日只今佛教を捨てる、魂の作用といふものは生きて居る間だけで、息引取ると共に消滅し去つて、何にも後にも前にも無いといふものならば、吾々は人生に對する考を根本から變へなければならぬ。大にして言へばそれが文明の岐點である、日本は魂の永存を信ずる文明か、フラテンの文明かといふことになるならば、今日の日本人の多數はフラテン文明に醉つて居るからして、斯の如き結果が現れて居ると斷言しなければならぬ。それは教へざるの國民である、コセ〳〵した知識は進んで居つても、魂の大事に就ては教へざるの國民である。

まだ〳〵大事な事が澤山ある、吾々の魂が永遠に存在するといふに就ては、その魂と相結ぶところの宇宙に就て、宇宙には魂有りや無しや、この宇宙には大人格者が存在するや否やといふことが、また教教の大事な要素である。日本にはたゝ神樣といふ語があり、儒教にも天道といふ語があり、基督教でも神と言ふ、いろ〳〵漠然たるものはあるけれども、基督教の神の如きは創造の神にして、世界を造つたナンと言ふのであつて、到底眞理の研究に於ては存在しないものである。存在すると言つてもその存在の意味さへ明かにならない、天國とはどんなものだかわからない、とう〳〵『形無くして在ますと言ふ所無し』といふやうな所に逃込んで居る、これを宗教の雪隱詰めと言ふのぢや。形無くして在ますと言ふ所無しといふのだから、空氣か瓦斯みたいに、緣の下に逃込んだやうなものである。而かも神の恩寵を說いて居るナンといふことは、基督教が宗教として薄弱なるが故に、眞理の攻擊に耐へずしてそんな所に逃込んで、形無くして在ますと言ふ所無し、スーッ……といふやうなことになつて居るものである。そんな事で人間の精神を繫ぐことの出來るものではない、人間が實在を希望するのは、そんな瓦斯のやうなものになりたくないといふのが宗教心である。瓦斯のやうになつたり、泥溝の水になつても存在して居つたら宜いといふことならば、何も宗教などを求める心配は無い、死ぬぱ誰でも皆灰になつて居るではないか。さういふ風な事では滿足をしない、完全な人格を以て存在して行くことを希望するものを宗教と謂はなければならぬ。況んやその信仰を繫ぐ相手方が、形も無く、姿も無く、たゝ在ますと言ふ所無しといふやうな、さういふものを以て滿足し得られるものではない。これは人間の情意を無視したる思想であつて、完全なる宗教心を滿足せしむるものでもなく、又哲學上の實在の眞相でもない。そんな

形も無いやうな實在は、哲學の上に於ても價値無きものである、抽象實在論といふやうな、そんなスーッと言ふやうな實在が哲學の上に何の價値があるか。哲學でさへも價値を認めないやうなものを、宗教の信仰の上に持つて來て價値が出て來さうな筈がない。それであるから基督教の神に關する說明などは、苦し紛れに逃込んだ言ひ草といふものである、自分自身がそれでは滿足しないではないか、愈々願望成就したらスーッと瓦斯みたやうなことになつてしまふ、そんな馬鹿氣た事があり得べきものではない。

だから宇宙の本質を教へる場合に就ても、假に彼等の說く所を同じやうに教と言つて居るけれども、眞に宗教に就ての研究が進んで行つたならば、魂の眞實を說く上に就ても、拜むところの對手方の眞實を說く上に於ても、この宗教の二大教義といふものは、獨り佛教に於てのみ人類を滿足せしめ、人類を救ふことが出來るものであるといふことは明かなのである。

左樣にして日本の今日の人々にも、この魂の本躰と宇宙の本質とに就て徹底したる信念を與へさへしたならば『それは如何にも有難いものだ』といふ考がどんな人間にも起つて來る、又それから一切の行爲が導かれて來るから、すべての行動が變つて來るのである。そこに今の所謂享樂主義に流れ、物質的享樂に偏傾して居る思想も救はれて來るし、物質の爭ひの爲に左傾兇暴に流れて居る思想も救はれて來るし、いろ〳〵な社會の百弊といふものは、人間の生命の實在及び因果應報の理を信ずることに依つて全部變つて來る。その意味に於てお釋迦樣は斷見外道を攻擊せられた、斯うさへすれば世は平和に歸する、斷見の間違ひを政治の本に置き、文化の本に置いて、さして國政が治まるの、文明が進むのといふことがあるならば、俺は首でもやると釋迦如來は斷

言されて居る。今や即ち世界を擧げて、この宗教の二大要素たる生命の實在及び宇宙の大人格者の實在といふことが、いろ〳〵の小理窟の爲に跳ねまくられて、宗教が人心を繫ぎ得ないやうになつた時、斯の如く世界は即ち腐敗墮落の文明に陷つたではないか。併し今日の弊害は、もはや基督教に依つてこれを救ふことは出來ない、儒教に依つても神道に依つても出來ない、他の學問に依つても出來ない。たい人々の心に對して『成程さういふ譯かナ、吾々の生命は永存し、その生命の內容は斯の如く尊きものであるか、而して宇宙には斯の如き尊信すべき大人格者が在ませるか』といふことを十分に滿足せしめ得る教を有つて居るものは、獨り本佛釋尊の御教のみである。

さういふ結構なものが日本にある。日本が尊いといふのは、たゞ空虛で尊いと言つても駄目である、何が尊いか。さういふ教が早く日本に傳はり、聖德太子以來朝廷の御力も加はり、又吾々の先輩の高僧碩德も輩出して、この本佛の御教を擁護し發揚して今日に來つて、今なほ其の御教の光は世界中に於て日本が一番より多くこれを擁護して居るといふ點に於て、日本の誇りがあるのである。

以上は教の事であるが、モウ一つはそれと同時に吾々を救ふところの力である。實はその點に就て詳しくお話したいと考へて居るのであるが、今日はさういふ話を順序立てゝ講する時間を有たないから概略に止めるが、本佛の力といふものを見るのに、今申すやうな教を以て人を導く教化力といふものと、いま一つは教ではなくして、何時でも吾々をあらゆる點に於て一切救ひ護つて下されるところの御力、神通力と言ふか、救護力と言ふか、その佛の御力といふものを考へて見なければならぬのである。お經の上ではハッキリそれが分けられて居つて、寧ろその救ひの力、護りの力といふものが正面に現れて居

るのである。例へば譬喩品の主師親三德の文の所にも

『唯我一人能爲救護』

と說かれて、救ひ護るといふことが主である、その救ひ護るといふことの中に、敎を說くといふやうな事も現れて來るけれども、どつちかと言へば敎を說くといふことは、佛の吾々を救ひ護る力用の一部分である。又壽量品に來れば、

『如來の秘密神通の力』

とある、この神通の力といふことになると實に廣大無邊にして、竪は三世に高く、橫は十方に遍く、それは無論法を說くこともあり、身を現ずることもあり、千變萬化極り無く、端倪すべからざるところの廣大無邊の御力を有つて居らるる。時々刻々に一切衆生を導き給ひ、救ひ給ふところの御力である、『如來秘密神通の力』、これを詳しく說かんが爲にこの壽量品を說くなりといふことになつて居るのである。

だから壽量品に來る前の涌出品の所を見れば、上行等の菩薩が出現をせられて、今お釋迦樣が何をしようとしてお在でになるかといふ時分には、『力』といふ字を以てこれを表はして居られるのである。

『如來今は諸佛の智慧、諸佛の自在神通の力、諸佛の師子奮迅の力、諸佛の威猛大勢の力を顯發し宣示せんと欲す』

これより說かんとするところの如來壽量品なるものは、自在神通の力、師子奮迅の力、威猛大勢の力を說かんとするものである、たゞ敎を說くといふだけではない、敎も力の一部として表はれるけれども、必ずしも敎だけではない。從來の佛敎の惡い癖は、敎を尊ぶといふことも宜いけれども、たゞ敎と言ふからそれは釋迦の在世の事で、三千年の前に天竺に釋迦が出て說法せられ、靈鷲山で法華經を說いて、その法華經を阿闍世王に依つて結集されて、それが支那に渡つて飜譯をせられて、朝鮮から日本に來て傳つて、本屋から買うて來て此處にお經がある、これが敎へや、さうして今度お釋迦樣が有難いといふのは、お經を見て、これからだん〳〵覺つて、又三千年の昔に遡つて、そんな譯であるか、跋提河の邊りに涅槃せられたけれども、やはりござるのかナ、ござらぬのかナ……とまごつついて居る、そんな事にまごつく必要はないのである。法華經の壽量品に來れば

『我常に此に住すれども
顚倒の衆生をして
諸の神通力を以て
近しと雖も而も見えざらしむ』

とあつて、每もチヤント汝等の側に居るのだといふことを嚴重にお說きになつた譯である。活ける絕對無上の釋迦牟尼佛はチヤント此にござる、『我常に此に住す』、近い所にござるけれども、吾々は煩惱の爲にこれを拜することが出來ないのである。

そこでその實在といふことがハツキリわかつて來たならば、その實在といふことが何の爲であるか。嗚そこにござる〳〵といふだけのものではない、吾々に對する直接の活ける、新たなる救ひの力が、我が上に降つて居ることを『常に此に在る』といふ譯である、汝等の側に居るといふことは、側に居て欠伸をして居られるのではない、側に居て汝等を護つて居るといふことナンである。ちようど我が國體の事に就て例を引けば、我が皇室に於ては聖德を有し給ふといふ、その聖德を有し給ふといふことは、向ふで有つてお在でになるばかりではない、その聖德は稜威の力となり、稜威の力は內は國民の上に被つて國民の安寧幸福を保全し、外は世界に及んで即ち正義人道を擁護し、世界の文明を大成するところの御力となつて現れる、稜威の力、內に外に活躍するといふことが本當は皇室を戴く所以である。たゞ向ふに斯ういふ德を有つてござると言つて、風呂敷に包んで床の間の上に置いて居られる譯ではない、

その聖德が稜威の力となつて國民個々の上に活躍して居ることに依つて　天皇陛下は有難いと感激しなければならぬのである。お釈迦様の有難いのもその通りである、教を以て心を導いて正しき觀念に入らしめることも佛の有難い點ではあるけれども、それよりも先づ吾々の悶える心、吾々の苦しめる心、頼り無きところの心に向つて、母が子を護るが如く、學校の先生がボールドの前で物を教へるのと違つて、お母さんが、寢て居る時も如何なる場合に於ても側に居て子供を世話して護つて下さるやうに、その親しき救ひ、温かなる救ひといふものを、本佛釈尊の御力は吾々の上に何時も〳〵與へられて居るものであるといふこと、それが壽量品を說かせられた眞目的である。その道理や經文の證據を順序立てゝ說明することは略して置くが、たとその一端を申したのである。

そこで吾々は左様に考へて、何時でもその救ひは今現に此處にござる佛様が救ひ下さるのである。自分の活きた信念と、活きた佛様の慈悲とが感應感孚して茲に廣大無邊の御利益を生じて來る。それがどういふ力となつて現れるかと言へば、個人の願望をも成就せしめ給ひ、又全體的の團體の願望をも成就せしめ給ふものである、その兩方面に向つて一切を護り給ひ、一切を救ひ給ふものである。それが救護といふことである、『救處、護處、大依止處』といふこと經に始終說いてある、救ひの本源であり、護りの本源であり、一切のものゝ依つて立つ處である、大地に立つて居るといふのは、たゞこれは吾々の肉體であるけれども、こんなものはグラ〳〵ッと來れば木端微塵になつてしまふ。一切の物が破壞せられても安住を失はないところの、一切の者を救ふ力、これを本佛釈迦如來は有し給ふ、『此の三界は皆悉く我が有なり』、一切衆生を救ふ大依止處は即ち我なりとして釈迦如來は立たれて居る譯である。

そこでその本佛の力に依つて滿される吾々の願望といふものを考へると、先づ個人の願望としては、宗教心理の方から考へれば、吾々の懺悔の宗教心理、いろ〳〵な罪障の消滅を願ふところの思想といふものがある。それはたゞ現在に於て造つたところの罪障ばかりではない、六道輪廻のその中に積み成したる惡業に依つて、今なほ吾々は人間界の果報は有つて居るけれども、これ以上に行くことの出來ない果報しか有たない、そこには所謂煩惱障、業障、報障等の三障四魔紛然として競ひ起つて、我が最勝菩提を成就せんとせることを妨げるところの罪業は人各々これを有するものである。そのお互ひの罪業といふものゝ消滅を祈らなければならぬ。又そんな大きな所まで行かなくても、人間いろ〳〵な惡業罪障を有する故に、思はない災難に遭うたり、いろ〳〵な苦勞にぶつかつたりする譯なのであるから、罪業消滅を祈る心は何人にも起るのであるが、その場合に、鬼子母神様に願を懸けて祈るとか、帝釈様に鹽物斷ちして祈るとか、そんな事をやらなくとも宜い。一切は皆本佛釈尊の御力の下に歸つて、如何なる惡業煩惱ある者も釈尊の大慈大悲の御力に縋れば、それは恰も霜露の陽の光を受けて消えるが如くに、如何なる惡業煩惱も罪障も消え去るといふ信念に立つのが、法華經を信ずるといふことである。それ故に法華經に於てはどのやうな罪業の深き者でも、阿闍世のやうな父を殺し、母を餓死にしようとしたやうな惡人でも救はれ、提婆達多も救はれ、又罪重しと言はれて居つた女人も悉く成佛を許されて居る、如何なる者も法華經に於ては救はれざる者無しといふことは、どんな罪業深重の者でも救ふところの力があるからである。鬼子母神のやうなものでも、これは罪業深重の鬼婆である、人の子を取つて食ふといふやうなものであるから、最も恐るべき安達原の鬼婆であるが、それでも釈尊の御力に觸れた時は善心

に歸り、惡業煩惱を打消して遂に法華經擁護の善神となつた譯である。それが即ち佛樣の吾々の罪業煩惱を救うて下されるところの力である。

又吾々はあらゆる願望を有つ、志を立て、理想を立てゝその事を成就したい、學問を成就し、或は事業を成就しようといふ望みがある。それに就ては自分の努力奮鬪は無論大事であるけれども、努力奮鬪のみで及ばぬ事が出來る、その場合には隱れたる加護として本佛釋尊の廣大無邊の大慈大悲の御力と結べば、我が願行成就せざる所無しといふことになるのである。即ち日蓮聖人の一代を見れば最も鮮かである、あの困難なる事業、北條と鬪ひ、各宗の僧侶と鬪つて法華經の宗教を立てられたが如き、あらゆる壓迫を加へられて居る裡に生命を完うしてその主張を通し得た。聖人は龍の口に於ても勝利を得、佐渡ヶ島に於ても勝利を得、如何なる場合に於ても勝利を得て、最後

たちわたる身のうき雲もはれぬべし
たへの御法の鷲の山風

と凱歌を奏したのである。だからこの本佛を信ずる以上は如何なるものも敵する者は無い、日蓮聖人はその事を叫んで居る、如何なる反對の惡魔と雖も、我は本佛釋尊を戴くが故に畏るる所はない、第六天の魔王も來れ、如何なる惡魔も來れ、本佛釋尊の前には汝等何ものぞと、叫んで鬪つたのである。だから吾々の願望を成就せんとするところの欲求に就ても、本佛の御力を信じなければならない。

又吾々は人の知らないやうな心の煩悶、惱みを有つ、つまらぬ事のやうでもその人に取つては他人にも語れないやうな悲嘆を有つものである。その場合にも本佛釋尊の御慈悲に縋れば、自然々々に、ちようど曇つて居つた天氣が雨か降らないで、何時とはなしに晴れて非常に好い天氣になるやうな調子に、吾々の心のモヤ〳〵した煩悶の雲は追拂はれて、麗かなる光明を拜することが出來るのである。身に病ある者は無論醫藥を服し、養生するのは當然の事で、佛樣の敎には醫藥の事を大事に說かれ、看病の事を大事に說かれて居るが、醫藥を服するにしても心が落着いて居らなければならぬし、又或る種の病氣は精神力に依つて大にその効を奏するものであるから、吾々は縱ひ病氣になつて醫藥に親んで居る場合でも、そこに本佛釋尊の大慈大悲に縋れば、我が病氣は決定して平癒疑ひ無し。嘗ては日蓮聖人は、伊東朝高を禱つてその病癒えたり、阿闍世王の白癩は釋尊の月愛の光に照らされて癒えたり、さういふ病の癒えるやうな事も本佛の力に於ては疑ふ所は無い。たゞ病氣ばかりを祈つて居るから間違ひが起る、佛立講のやうに朝から晩までカチ〳〵やつて居るからいかぬ、さういふことは洵に愚な行動である、モット〳〵麗かに、正々堂々と、何もさう長いこと題目を唱へなくても、本佛釋尊の實在を信じて、心靜かに聲朗かに南無妙法蓮華經と唱ふる時、身に病ある者は病療ゆべし、一切救はるべしと信じて進んで行けば宜しいのである。

又吾々は親子兄弟の中にもだん〳〵死別れして行く者もあるし、又自分自身も死んで行くのであるから、これは結局佛樣にならなければならぬ。不滅の生命が遂つて或は餓鬼となり或は地獄となつだならば洵に慨かはしい次第である、『お母さんは今何處にござるか、餓鬼になつてござるか、蛙になつてござるか』といふやうなことでは實に忍びない事であるから、どうぞ自分の親しい者は謂ふまでもなく、自分も遂には佛果を成就しなければならぬ。何れの力が我をして佛たらしめ、我等の親しき者を救ひ給ふぞと考へたる時、他の敎は僞はり多くしてそれは何にもならぬ。そこを日蓮聖人が血と涙を以て說いたのである。たゞ獨り本佛釋尊の御力のみは眞實如何なる惡人の提婆をも救ひ、或は龍女をも救ひ、一

切を救つたのである、汝等法華經に來れ、汝の父如何に惡人なりと雖も提婆よりは惡ならざるべく、汝の母如何に愚痴なりと雖も畜生よりは愚痴ならざるべし、必ずや法華經に於ては汝の父母をも救ひ得る、内典の孝經は法華經なり、これに來れよと言つて日蓮聖人は絶叫したのである。その信念ある者にして初めて法華の信者である、たゞドンドコ〳〵とやつて鬼子母神や帝釋の所に行つて『どうです、成佛さして呉れますか』と言つたら、鬼子母神や帝釋は返事に困る、『こつちがまだ迷つて居るのだ』といふことになるではないか。それ等の天上界のものはまだ六道の迷ひの中である、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上といふ六道の輪廻を脱し切れないものである、そんな所に行つてお助け下さいと言つても『それはお前方角が違ひはせんか』と、向ふから文句を言はれなければならぬ。そんなまごつくやうな事をやつてはいかぬ。本佛釋尊の御力に縋れば、

如何なる者でも成佛せざること無し、日蓮聖人は最後池上に於ける袂別の說教に何と仰しやつたか。汝が父如何に惡人なりとも、提婆よりは惡ならざるべく、汝が母如何に愚痴なりとも畜生よりは愚痴ならざるべし、然るに法華經は龍女の成佛も許され、提婆の成佛も許された、汝の父母を救ふものはこの法華經なるぞといふことが、弘安五年十月十二日の夜の袂別の說教であつたのである。その事は正確なる傳記に悉く遺されて居ることである。だから父母兄弟故舊知己の追善回向の爲にも、自分の永遠の菩提の爲にも、本佛釋尊の御力に縋らなければならぬ。

これは個人的の願望を言表はすのであるが、進んでこれを團體的の社會國家の興隆進歩といふことに考へたる時、やはり本佛釋尊の御力に縋れば、立正安國論の中に言はれたるが如くに、

『三界は皆佛國なり、佛國それ衰へんや、十方は悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや、』

即ち本佛釋尊を中心に戴いて行くならば、そこに眞の社會、眞の國家といふものは建設される、さうして遂に世界の平和を導くことが出來るのである。どうしても偉大な宗教を基調としたる文化を以て闡ふものでなければ、最後世界に勝利を占めることは出來ない。縱ひ日本の國體國風が如何に偉大なりと雖も、日本の文化が無宗教で進んだる時には、他に何等かの宗教的結束が現れて來て、遂に日本が世界の光となるといふことは不可能である。この偉大なる國體と共に法華經のやうな偉大なる宗教を掲げて以て進んでこそ、法國冥合の理想に於てこそ、日本が世界の光となることが出來るのである。それが爲に日蓮聖人は『法を知り國を思ふの志』から、法華經が日本の國に渡つて來たといふことに就て、この國は實に大事な國と思つて居つたが、そこへこの法華經が來つたといふことは、こんな嬉しい事は無い、『この經典緣東北に在り』とは月氏天竺より日本國を指されたものであるが、洵に此の國、此の法、相合したる時には恐るべきものは無い、この事を想ふとき歡喜身に餘り感激の涙瀧の如しと日蓮聖人は叫ばれたではないか。吾々も瀧ほどは出なくても、二滴や三滴の涙は流さなければならぬ。然るに國を思へば法を忘れ、法を思へば國を忘れ、いつ迄經つても不得要領な事を言つて居るといふのは、實に六百數十年前の大聖人の辛苦に對して申譯の無いことである。

事は明瞭である、本佛釋尊の御教に依つて吾々は正しき觀念を導かれて、釋尊の御救濟の力に依つて吾々の精神の平和を得、本當の宗教の歡喜法悅の心に活きて、その法悅の喜びの中から一切の活動の力を產出し、さうして光輝ある活動を世に遺して行かなければならないのである。さうしてこれは個人の願望も並に社會國家の願望も皆叶ふのであるから、そ

の點を本當に心得て、さうして常に本佛釋尊の大慈の御手は我が頭に來り、本佛釋尊の大慈の御光りは我が心を照らし、本佛釋尊の大慈の御力は我等の身も心も一切殘らず救うて下されて居るのである、我は救はれたる人であるといふことを考へて、歡喜法悅に活き〳〵したる生活を營むのが、これが眞の日蓮教徒といふものである。希くばこの力、この歡喜を一切の國民に頒たんが爲に、吾等は街頭に立つて奮闘して居る次第である。

以上申した事柄を簡單に纏めてこれを我等の朝夕の心得としたいと思ふ。

一心清淨に本佛釋尊の大慈大悲の御力を信じて、聲朗かに南無妙法蓮華經と唱ふべし。然らば一切の罪も消滅し、一切の願も成就す。若し人心に惱みあらば惱みを除き、身に病あらば病を除き、一切救はるべし。又志すところの精靈は直に菩提を成就し、人々の生活は安穩なるべし。世は平和に歸し、國は興隆すべし。一心清淨に本佛釋尊の大慈大悲の御力を信じて、聲朗かに南無妙法蓮華經と唱ふべし。

今本佛釋尊の大慈大悲の御手は我等の頭を摩で給ふ、今、本佛釋尊の大慈大悲の御光りは我等の心の闇を照らし給ふ、今、本佛釋尊の大慈大悲の御力は我等の身も心も一切を救ひ給ふ、あな尊とや 南無妙法蓮華經。

（完）

先づ心を救へ

大僧正　本多日生

釋迦如來の御一代の御活動を考へると、いろ〳〵なさつた事があるけれども、これを纏めると衆生濟度の一つになるのであつて、その衆生濟度の事柄もだん〳〵調べて見ると、即ち衆生の心を救はれる事が主になつて居ると思ふのである。釋迦如來のやうな卓見な方がいろ〳〵御考慮なされた上から、すべての仕事の中に、人の心を救ふといふことが一番根本であり、重大であるとお考へになつて左樣なされた事であつて、吾々は深くその點に思ひを致すべきことゝ思ふのである。又今日の日本の國情に就てこれをどうしたらば宜いか、即ち國を救はなければならない、我が國家の災厄を追拂つて健全なる國家に造り直さなければならないと言はれて居るが、その種々なる時弊といふものをだん〳〵手操つてその根源に歸して見るといふと、やはり國民の心が悶えて居るので、先づこの國民の心を救ふといふことが究極した根本の問題になると思ふのである。さういふ點から考へて、一切の事に先んじて人の心を救ふといふことにモット力を盡さなければならない、その事をお話しようと思ふ。

國家の現狀に就て考へて見れば今日の弊害は三つの事が數へられて居るのである。第一は人心が墮落して行くといふこと、そこにはいろ〳〵の享樂的なる生活が起つて、それが爲に社會に於て樣々な過誤が起つて來る、いろ〳〵墮落したところこの社會現象が現れ、それも大分激しくなつて來て、この儘に置

いては遂に國家の進運にも影響をするといふやうな有樣になつて參つたのである。ザッと考へても今日の青年男女の頭腦を支配して居るものは、物質的の享樂に傾き過ぎて居るやうに思はれるのである、その甚しき者がだん〳〵惡化しては不良者となり、又は犯罪者となり、或は種々なる醜い社會現象を現して來る譯である。それが活動寫眞の上にも或は流行歌の上にも、いろ〳〵の所に現れてガタ〳〵と騷しく〳〵なつて居るけれども、根本は人心の墮落に基くものである。

いま一つは思想の惡化であつて、何となく反抗氣分が高まつて荒らいだやうな心が強く動いて、素直に從來から在りし道德或は宗教に順ふといふやうな考が無く〳〵なつて、いろ〳〵理窟を言つては、さういふ道に順ふことを嘲るやうな氣分が濃厚になつて來た、その甚しき者は奇矯な言動に移つて、遂に左傾的の行動を執るやうなことになつて居る。それもなか〳〵激しい勢ひで蔓延しつゝあるのであつて、共產黨事件以來第二回第三回と檢擧されて、最近にも亦多數の者が檢擧されつゝあるやうである、それは赤化總動員といふやうな事を言つて、教化總動員に反抗する爲に、高等教育を受けて居る學生の間に全國的の聯絡を執つて、さうして益々今の左傾運動をやらうといふやうなことになつて居る、なか〳〵その計畫は驚くべきものだといふことであるが、併しその詳しい事は新聞にも掲載を禁止して居るやうな譯である、支那からも共產黨員が日本に來てさうして騷ぎをやることになつて居つて、これも最近に檢擧が行はれたのであるけれども、一切新聞には書かぬことになつて居る。樣々な點に於てなか〳〵日本の人心の惡化といふことは猛烈な勢ひで起つて行き居るのである。左樣に思想が惡く〳〵なつて來て居る、今度の官吏の減俸といふやうな事でも、その事の當否はわからぬけれども、あゝいふ事が一たび發

表されると、それに對する反抗の氣分がなか〳〵激しく現れて、昨今の新聞を見ても穏かならぬ勢ひに在るやうである。その政策の可否は姑く別として、それに對する役人の態度が昔とは違つて居る事だけは能く見える、即ち人心の所謂反抗氣分が濃厚に現れて來て居る、一つ違へば大騷ぎにならうとする、ちようど前年の米騷動のやうな事を勃發せんとする機運が相當高まつて居ると思ふのである。

いま一つは一般的の不景氣、生活の不安であつて、これも餘程廣い範圍に及んで居る、農村に就ても農民は相當不安を感じて居るし、又商業の方も今日は不振であつて、いづれの商人もなか〳〵困つて居る譯である、工業も見込が立ちにくいやうになつて來て居る、農工商の何れの方面を見渡しても隨分經濟的に困難に當面つて居るのである。

先づこの三つの事柄がこの儘にして行くと日本が危ないといふことで騷いで居るので、どうか人心を引締めて思想を穏かにしてこの難局を切拔けたいといふことが、先づ今日の國家に取つては一番大事なことになつて居る。それは至極尤もな事であるが、それがなか〳〵思ふやうには改善されて行かないだらうと思ふ。今日の人心の狀態の儘でさういふ事を論じても、やはり墮落する者は沼々として墮落し、惡化する者も亦なか〳〵その敎を減じない、さうして經濟界も思ふほどには直つて來ないのではないか。さうしてぐづ〳〵するとその間にだん〳〵人心といふものが倦んで來て、結局は暴動にまで進んで行くといふやうな、甚だ不穏な徵候に進むのではないかと考へられるのである。或る人は、最早やこれはどうも免れぬ事のやうに考へて悲觀の極に居る人もある。相當識見有る人が今日の日本の國情を觀察して、いろ〳〵手は着けるのであるけれども、結局はどうもこの難病は癒らぬのではないか、それは服藥療養を試みるけれども、藥を服みながら遂に病勢

が重つてうまく行かぬやうな事になるのではなからうかといふまでに、相當深刻な識見の有る人が今日左樣に慨いて居る譯である。政治上からもいろ〳〵の方策を講じ、或は教化運動もやつて居るけれども、この藥が効かない内に病勢の方が昂進して、結局困つた事にまでぶつかつて、いよ〳〵酷い目に遭うてから多少反省するかも知れぬけれども、その時は手後れといふことになつて、『モウ少し早く氣が附いたら宜かつたのに……』いふやうな事で、日本の國家の前途は恐しい事になるのではなからうかと憂へられて居る。自分共はやはりさういふ考に居るのであつて、決して生温い事でこの日本の難局は救はれないと思ふのである。

それはどうして救はれないかといふと、斯ういふ弊害の起つて來て居るのは偶然ではないのであつて、外來の思想にかぶれたとはいふものゝ、やはり國民の精神にそれだけの間隙があり、空虛な所があつて、そこへ押返んで來たのである。日本の文化にそれだけの缺點があつて、その缺點の所を突かれたものと言うて宜いと思ふのである。こちらが確かりした文化を持ち、國民の教化訓育その宜しきを得て居つたならば、何も西洋の左樣な思想が押寄せたからと言つても、それにやられる譯のものではないのである。一概に他の國が惡いとのみは言はれないのであつて、世界的に思想の戰ひといふものが今日は始まつて居るのであるから、露西亞から言へば共產主義を吹込んで日本をガタ〳〵やらさうといふことは、露西亞の國策としては當然かも知れない、それにウカ〳〵乘つてソビエットの手先になるといふ日本の國民がある、その國民が惡いのである。露西亞がさういふ事を宣傳しようといふのは、彼は爲にする所があつてやるのであるから、こつちから言へば惡い事だけれども、向ふにはチャントそれだけの言ひ分があつてやり居る、日本人がそれに引掛つてその手先になる、手先になるやうな人間を日本に拵へて居つた方が惡いのではないかと思ふ。又いろ〳〵な墮落するやうな文學が入つて來る、それが爲に墮落するのだと言ふ、それにも違ひないけれども、併し何時の時代でも墮落するやうな文學といふものはあるのである、いつの時代でも人間を墮落せしめる社會現象といふものは揃つて居る。日本でもズット昔から隨分激しいさういふ類の書物が澤山ある、又さういふ社會現象もあるけれども、併し學問をしたり精神を鍛うたりするやうな者は、さういふ事の爲に惑溺をしないやうに警戒しつゝ戰つて、さうして今までの人間には確かりした者が出來て行つたのである。昔は墮落する機關が無かつたといふものではない、やはりなか〳〵墮落すべき事柄はあつたけれども、併しそれを非常に注意して進んだのである。だから今日斯ういふ時弊が起るといふものは、日本人の教育なり、教化なり、薫陶の仕方、大にしては日本文化の建設方針に於て多大なる缺陷があつて、それが爲に斯ういふ失敗が起つたのであると考へて、そこに根本的の反省をしなければ、誰が惡い、彼が惡いといふやうな事を少しづゝ言うて居つたところが、それで救はれるものではないと思はれるのである。

さうするとその根本は何處から來るかと言へば、これは人間の性情に有つて居るところの要求なり、性情に有つて居る弱點なりが救はれて居ない爲に斯ういふ事が起るのである。人間の性情から來る要求といふのは、どうしても人は精神の平和滿足を要求するものである、小さく分ければ幸福といふものであるが、併したゞ單なる幸福ではない、幸福感と同時に人間の理想といふか、觀念を滿足せしめるものを得たいのである。それはチョット見ると二つのやうに見えるけれども、自分が氣の利いた事をして人に讃められるといふやうな事が、人間に於ては非常

な幸福感である。即ち美味い物を食ふのと讃められるのとどつちが宜いかといふことになれば、通常の人は、人に笑はれても牡丹餅を喰じるといふことはしない、牡丹餅は食ひたけれども『マアあなたから……』と言ふ。他人がどういふ風に見ようとも、行儀が悪いと言はうとも、いきなり手を出すといふ者もあるけれども、それはズット低級な者で、百人寄せてもそんなのは五人か七人ぐらゐで、餘は直ぐに食べたいと思つても『マア〳〵』と言つて居る。さういふ風に普に物質的の享樂よりも、人間の品位とか人間の名譽とかいふ所に又幸福感といふものを有つて居るのである。であるから他人が尊敬を拂つて呉れ、叮嚀にして呉れたならば、少々食べる物は不味くとも滿足する、ところがどんなに御馳走があつたからと言つても、『サア食つて行け、これをお前に食はしてやるから……』と言はれたならば、ズット下等な者はそれでも『ヘイ有難うございます』と言ふけれども、對等な者の所に行つてそんな事を言はれたならば、『失敬な事を言ふな、家へ歸つて茶漬を食つたつてそんな物は食はぬ』と大抵の人は言ふだらう。だから人間の幸福感を分けるといふと、單なる物質的な享樂的のものと、モウ少し高い品位の方から來る思想といふものがある。婦人が美い着物を着るのでもその通りであつて、何も特別に着心地が良いといふ譯ではない、やはり『あの人は美い着物を着て景氣好く〳〵やつて居るナ』と思はれたいといふ心があるので、單にそれは自分の享樂ばかりではない。男子で言へば堂々たる力を養うて力の競爭に負けないやうにしよう、女性は女性の優美な所を發揮して他人に敗けないやうにしようといふ意味であつて、單にそれは享樂といふやうな事だけではない、一切の人間の行動はさうなつて居る。

ところが幾らさうやつて見てもそこに大きな缺ける所が出來て來るのである。男子で言うたならば、今の物質的享樂とそれから精神的の幸福感、名譽であるとかいふやうな精神を滿すべきものが思ふやうに得られない、骨折つて大學を卒業しても月給が取れぬとか、月給が取れずにまご〳〵して居れば無論名譽は無い、家へ歸つても『いつまでブラ〳〵して居るのだ』と言はれるし、他家へ行つても學生時分ならば宜いけれども、學校を卒業してから穩ない着物を着て行けばやはり尊敬されない譯であるから、そこで物質的の享樂も得られず、精神的の名譽も得られずしてまご〳〵して居る。その不平不滿の結果、人を呪ひ世を咀つて『一つ石でも投げつけてやらうか』といふやうな事になつて遂に左傾思想みたやうなものが起つて來る、それの出來ないおとなしい人間は、少しの錢で酒でも飲んでごま化してその精神を紛らかす。精神の不平とか不滿とか、心の上に非常に渇する所があるから、穩かな者はこれをカフエーに行つて慰め、兇暴な者は左傾運動みたやうな事をやつて、これを滿さうといふことが起つて來る譯である。婦人でもやはりその通りである、精神上に多大な缺陷を有つて居るから、先づ着物とか芝居とかさういふものに依つて一時空虛な所を補はうとするのであるから、精神に於てそれだけの力が無く、滿されて居ない者に、何にも物質的の物を與へなかつたならば、モウつまらないからグンナリしてしまつて何もしなくなつてしまふ譯である。だから生きる事が出來ぬと言つて今日の女の人が死なう〳〵と言ふ、無理もない、生きて居つたつてつまらしい、着物も着られないし、美味い物も食へないし、何にもならぬと言つて非常に人生をつまらないと思ふ者が殖えて居る。無理もない譯である。心の内面生活の方に於ては全然何物も得て居ないし、外部の方の享樂は思ふやうに行かぬといふことになるから、自暴な考を起すか、甚しい奴は亂暴な事でもする、カフエーの女給みたやうに、『他人が何と言はう

と勝手に言うて居れ、自分は自分の好きな事をする』といふやうな奴も出來て來る。ダンサーなどになつて居る者は多くはさういふ風で、他人が何と言はうと平然として風紀を紊るといふやうな事を自暴でやつて行く者がある、通常の者がどんなに批評しても平氣の平左で居る。それは到底外部から矯正さるべきものではない、それ等の婦人は可哀さうなことに心に何物も有つて居ない、それだからさういふ事になるのである。吾々でも同じものだと思ふ、吾々でも精神に於て何物もそこに滿されるもの無しに、さうして外界の物質をも與へられぬといふことになれば、『いつその事喧嘩でもしようか』といふことになる、これは人間の寧ろ活氣ある者は當然さう行くべきものである。それでも弱つてペコ〳〵になつて居るといふのは餘程軟弱な腰拔であつて、少し力の有る者は寧ろ何事か爲さんとするところの考が多く起る。だから滔々として天下はさうなつて行き居る、大勢の學生や青年が皆變な事をやり居るといふのは、それはたゞ表面の弊害ではない、精神を救はざるの弊害と謂はなければならぬと思ふ。

その點を政治家なり學者なりがモット能く看破しなければならぬ、たゞカフエーの取締などをして、十二時から後は營業してはいかぬとか、無暗にあつちこつち出入りする者を捕へて拘留にするとか、それもまア善い事である、さういふ事も感かしの爲には宜いけれども、又さういふ事をやつたら彼等はそれを脱れる方法を講じて來るから、どうしても駄目ナンである。モットすべての國民の精神を救うて、さうして精神的の幸福を與へ、精神生活の喜悦を增加して行くといふことに依つて、この人心の頽廢、思想の惡化、生活の不安といふものを和げることが出來るのである。精神に滿されて居つたならば外部の生活が乏しくとも滿足をするのである、精神が缺乏して居ると外部のものだけで幸福を感ずるから、

そこで生活がだん〳〵奢侈になつて生活の不安といふものに陷るのである。そこへ向つて政府で月給を減すといふことになつて來るから、『この上月給を減されてどうなるか、おのれッ……』といふ氣分になるので、チョット吾々が考へるのとは勢ひの出工合が違ふのである、昨今の新聞に現れて居る所を見ても、『おのれッ、こんな事をしやがつて……』とまるで敵みたやうに言ひ居るが、それは今の精神の救はれざる人々の間に起る愚劣なる葛藤であると思ふ。如何樣に政治を改善しても、經濟を立直しても、人生は足らず勝のものである。亞米利加は世界の富の七割を持つて居ると言ふけれども、それでも亞米利加にも乞食は一パイ居るし、食ふに困る人間も一パイ居る。だから日本人がどの位經濟的に富裕になつて、今日の富の三倍にもなつたからと言つても、困る人間が無くなる譯ではない、やはり困る人間は澤山出來て來るのである。さうして五十圓、六十圓で生活して居る人間と、百五十圓、二百圓で生活して居る人間とに就て考へて見ても、決して二百圓になつたからと言つて、それで十分の滿足がある譯のものではない、月給百圓で暮して居つた者が二百圓になつたならば、倍になつたのだから非常に宜いやうに思ふけれども、二百圓取つて居る人に聽いて見たならば『逆も二百圓くらゐでは仕樣がない』と言つて居る、どこ迄も行つても同じやうな關係のものである。日本國民に皆二百圓の給料をやるナンといふことは到底出來るものではない、どの位努力したところで、百年經つても千年經つても、日本の勞働者に殘らず百五十圓、二百圓の月給をやるといふことは出來はしない。さうしてその勞働者がチョット油斷をして生活するならば、今日の七十圓八十圓で生活して居る者が百五十圓になつてもそれは同じものである。それだから外部の物質に依つてのみ滿足を得ようといふことは到底駄目なんである。

と言つて勿論物質を全然除外するのではない、物質の方も出來るだけ高めて行くが宜い、産業の發達も圖るが宜し、生活の合理化といふこともやらなければいけない。例へば日常の生活に就ても、改善すべき點はモット強くやつたら宜からうと思ふ。着物などは、女の着物にしても同じ着物にしてしまつた方が宜からうと思ふ、赤十字の看護婦みたやうな洋服が宜いかも知れぬ、日本の着物であるならば帶も要り、羽織も要り、襟も要る、なか〳〵面倒であるから、安い羅紗の黑服か何かにして一種にしてしまへば宜い、斯ういふ事は幾らもやり方はあると思ふ。今度の吾々同志の屋外傳道に就て、報恩閣の婦人方が黑い着物に白襟の揃ひを拵へた、品は何であるか知らんけれどもさう良いものではないと思ふ、精々銘仙か紬ぐらゐのものであるが、なか〳〵綺麗に見える、それが二十人も二十五人も揃つて、屋外傳道に皆提灯を持ち、ビラを配つてやつて居るから非常に人の眼を惹く譯である。だから着物や何かの事でも普通婦人の考へて居るやうに、高い錢を掛けたらそれがキット良いといふ譯のものではない、モット錢の要らぬ事でうまい事がある、それは本當に研究すべき餘地が幾らもある。その他食物にしてもお粥を食ふといふやうな方法も善い事である、一日に一遍ぐらゐはお粥にしても宜い、お粥の嫌ひな人もあると言ふけれども、それは慣れないからであつて、結局お粥の方が宜い。支那の舊い書物を見ると御飯といふものはありはしない、皆粥である、御飯はお粥の出來損ひであつて、お粥の方が本當である、あんな強い消化の惡いやうな物を食ふやうになつたのは、謂はゞ勞働者とか力仕事をするやうな者が食ひ始めたので、チヤント家の内に座つて飯を食ふやうな者はそんなに強い飯を食うたものではなかつた。お粥を上手に拵へたならば實に美味いものである、支那人かお粥を養るのは上手であるが、良い船に乘ると、お粥を拵へて呉れと言へば實に上手なお粥を拵へて呉れる、その味は何とも言へない。日本人が粥を食ふやうになれば日本の米は半分も要らぬ、粥といふものは隨分殖えるものである、こんな少い米がこんなに殖えたかと思ふほど、粥といふものは殖える、さうして腹一パイ食べても直ぐ消化するから非常に腹工合が良い。大體人間の生活は衣食住が根本だから、家も無駄な事は餘りしないで、生活に工合の良い建築といふことを理想して行かなければならぬ。贅澤な建築をやつて、さうして貧民が恨んで火を放けるといふやうな事をしてもいかぬ。衣食住といふものゝ程度を節して、すべての者が恨まぬやうにやつて行く、その餘つた物を以て國家社會の改良に充てるといふことを、多くの國民が考へたら宜からうと思ふ。

さういふ方の政治の議論とか經濟上の議論はやつて行くが宜いけれども、それが行はれるか行はれぬかといふことは結局人の心の問題で、國民の心を救つて置かないとその話がわからない。心を救つてある人間ならば直ぐわかつて直ぐ實行が出來て行くのであるから、何よりもモット國民の心を救ふといふことに力を入れなければならない。

心を救ふといふのはどうするかと言へば、今言ふ精神の不滿不安といふものを除く方法を講ずるのである、即ち物質に依らずして、錢や金に依らずして人間の精神の不滿不安を除かなければならぬ。それは人間の情操を高めれば除かれて行くものである、自然の美に依つてでも幾分か除かれる、即ち其の一つの力は自然の美であつて、月を見るとか花を見るとか、自然といふものを眺めてそこに悦びの氣分を有つて居る人は餘程幸福な譯である。朝顏を洗うても『ア、今日も良いお天氣だナ』と思つて空を眺めたり、樹の枝を眺めて『ア〳〵良い心持だナ』と恍惚として自然の美を眺められる人は幸福である、お月

樣を見ては『ア、美いお月樣だナ』と言ひ、海岸へ行つては『よい海だナ』と思つて、その自然の美に打たれて感興を惹くだけの情操の發達して居る人は非常に幸福なる生活をする者である。さういふ事の無い人も澤山ある、お月樣を見せても花を見せても何とも感じない者がある、少し低い頭腦の人を試して御覽なさい、お月樣を見せても『お月樣はモウ何遍も見ました』と言つて一つも感じない、海岸に伴れて行つて海は廣いナと言つても『海が廣いのは當然です、あなたは始めて海を見たんですか』と言つて寧ろ不思議がつて居る、何も感興を有たない。少し情操の發達して居る者であつたならば、さういふ大きな所に行かなくても、田園道を歩いて、その畔道に咲いて居る小さな草花を見ても『ア、美しいナ』と言ふ、菫の花一つにも美を感ずる、蛙が妙な顏をして座つて居るのを見ても面白く感ずる、何處にも感興といふものは滿ちて居る。その自然の方から精神の力を養つて行くことが先づ一つである。けれどもそれだけではなか〳〵本當の强い力は出て來ない。

そこでそれをモウ一つ進んで行くと、そこに宗教の救濟といふものが說かれて來るのである、自然美の人間の滿足をモウ一つ奥深く本當に與へて行くものが宗教となるのである。お月樣を見て恍惚とするやうな氣分を、佛樣に對して、暗闇の中でも何時でもお月樣を見るやうな快い氣分が直ぐ起つて來るやうに訓練するのが宗教である、櫻の花を見た時の美しさよりもモット美感を感ずるものが宗教の信仰である。何時でも櫻の花を見て、鶯の聲を聞いて、お月樣を見て、海岸の廣い所に行つて伸び〳〵したやうな氣分が、如何なる場合でも出て來るやうに訓練して行く、これを宗教の信仰と言ふのである。お釋迦樣はその通り華嚴經にお說きになつて、信念といふものはさういふ意味のものであるといふことを、いろ〳〵譬喩を擧げられて居る、毒箭に射られた者が毒箭を拔いて貫つて傷が癒えて『あゝ快い心持になつた、今までは毒箭の爲にヅキ〳〵痛んで困つたけれども、モウ痛みが無くなつた』といふ時の心持、或は小さな家の内に押籠められて、裏を見ても三尺とは空地が無い、表の方は直ぐ往來であつてガタ〳〵して居るといふやうな陋屋に居つた者が、伸び〳〵した公園の内の家に入つて、周圍を見渡せば美しき草木が滿ちて居るやうな生活に變つた。といふ時の心持、それが信仰であると說かれて居る。宗教の信仰といふのはそれナンである、これを物質的に與へようとしたならばなか〳〵容易な事ではない、小さな家に居る者をば大きな家に入れてやるといふことになれば、同潤會が二千萬圓の資金を有つて居つたところが、これを入れる事は出來はしない、やはり少し安いぐらゐの家賃を取らなければならぬ、すべての人間に大きな公園の内に住ふやうな庭園を與へるといふことは、如何なる富を以てしても出來はしない。けれども宗教の信仰ならば、何萬人に與へても、何億萬人に與へても、少しもそれは足らぬといふことはない、幾らでも精神にさういふ歡喜を與へることが出來る。それならどうしたらそんな歡喜が出て來るかといふと、そこが一番大事な所であつて、簡單に話すことは出來ないけれども、少しばかりその意味合を話して置きたいと思ふ。

これは自分に就て考へる自力の方と、それから佛樣の方に就て考へる他力の方と、この二つを能く考へて、その自力他力が協力して現れて來るところに本當の歡喜の力といふものが躍動して來る、それが宗教の信仰である。自分の方に就ての歡喜は、先つ佛教の教の方からこれを申せば、自分の生命の本有常住といふことから出發して行くのである、魂の本體は常住不滅にして、始め無く終り無く續いて行くといふことと、さうして現在の生活は無常遷滅であ

るといふことと、この裏表の二つの關係を了解することである。本當は人間は死んでも消えない無限の生命を有つて居るけれども、今自分と考へて居る人生の生活は、一時間々々縮まりつゝあるところの有爲轉變無常迅速の世の中であることを能く味はふのである。普通の生活――佛教に依つて教へられざるところの生活は、現在だけが全體であつて、この不滅の生命といふものを知らぬ、さうして現在が無常遷滅であるといふことも知らぬから、現在に醉拂つて永遠を忘れて居る、そこに百弊が由つて來る譯である。お釈迦様はあの大きな智慧を以て種々と人間の研究をせられて、どうしてもこれは間違はぬといふことを決定されたものが、即ち斷常の二見を攻撃せられた事である。

斷見といふ方は、人間は死んだら魂は消えて無くなると言ふ、生命の永存を信じない者を斷見外道と言ふのである。常見といふ方は、うか〳〵暮して居つても人間の世の中はいつ迄經つても人間の世の中として續いて行くものだと考へる方で、人間はいつ迄經つても年も取らず、死にもせぬと思つて居る。チョウド今時のカフエーなどへ行つてワイ〳〵やつて居る連中の頭腦を分解したならば、人間はいつ迄も人間で、いつ迄も年を取らない、いつ迄も死ないと思つて騒いで居る譯である。人殺をしたり泥棒をする者でもやはりその通りで、いつまでも人生があると思つて居る、盗つたら最後死なければならぬと思つたら奪りはしない、今日の新聞にも、小僧を殺して金を奪つて逃げた犯人が、海岸の斷崖から飛込んで死んだといふことが出て居つたが、彼もいよ〳〵金を奪つてから怖くなつて死ぬ氣になつたので、初めから人を殺して金を奪つたら死なければならぬと思つたら奪りはせぬのである、奪つてしまつてから『サアこれはえらい事をした、刑事は追かけて來る、どうしても助からぬナと』いふことを氣が

附いて自殺したのである。あゝいふ風な者は皆人生の無常遷滅といふことを知らない、滔々として醉ばらつて居る者なンである。今の人心の墮落と思想の惡化といふものは、唯物主義の誤謬の上に起つて居る、死んだら魂は消えてしまふと思ひ、生きて居る間の變遷を知らない、刹那々々の生活に沒頭してしまつて、後も先も考へないといふことの爲に人心が頽廢し、思想が惡化して居るのである。

それ等を考へてお釈迦様は確に偉いと思ふ、人の世の中は斷見常見の二つを根源にして、樣々の邪見の稠林と言つて、間違つた事が一パイになつて、百弊これに依つて起るといふことを看破せられた事の如き、これ一つでも釈迦如來は實に偉い方だと思ふ。今の政治家は自分がやはりその斷見常見の考からまだ脱れて居ない、同じ仲間のやうな所がある、大臣が先に牢に行つたりするやうな所を見ると、どうもその仲間から通れて居ないやうに思はれる、同類の者がガタ〳〵言うて居るだけの話である。如何に無學に見えても佛の教を確信したならば、この斷見を警められたことに依つて、人が死んでも魂が消えるといふやうなことは考へなくなつてしまふ。人間の魂は生れる時に出來たものではない、本來から續いて居る魂が此世に來たものである。親から貰つたものでも、神樣から貰うたものでもない、自分の魂は始め無き以前より存在して居るものである。隨つて死んだからというてこれは消えてしまふものでない、奪られるものでない、自己といふものは始め無く終り無く存在して行くものである。そこに斷見といふものを打破つて、即ち人間の生命は本有常住なりといふ、生命の永存を確信するのである。それをお釈迦様が徹底的に説かれた。それから又人生に處する上に、常見の間違ひを以てフラ〳〵とたと暮して行くのはいかぬから、玆に無常迅速といふことを教へられた、『色はにほへど散りぬを我が世誰

ぞ常ならむ』といろは歌にもあるやうに、人生といふものは有爲轉變のものである、花は咲いても散り、月は出ても雲がかゝる、人生といふものはさう何時もフワ〳〵して居るべきものではないといふて、この人生に處する心得を浮つかぬやうに警戒を與へられた。一旦過ぎ去つてしまつてはモウ再び歸らないものである、だから人間は何時でも油斷をしないやうにしてやつて行かなければならぬといふ、人生の無常遷滅の事を敎へて警戒を與へられたのである。

そこでそれに伴うて起つた敎が因果應報の敎義であつて、この滅びない生命が、自分のする仕事に依つて、即ち業の力に依つていろ〳〵に轉廻して行くのである。だから人間がこの世に於て受けて居る幸運、不幸といふやうな事柄も、その人の因緣果報が大に關係して居る、全部前の生から來るのではないが、それだけの因緣があつて、そこに緣といふものが導けばそれが現在の果報として現れて來るのである。この世の生活に幸不幸といふやうな事が出て來るのも、決してその時突然に現れて來るのではない、因果の關係に依つて、即ち糸車に糸が捲いてあるやうな工合で、それを繰つて行けば白い所が出て來たり、赤い所が出て來たりするやうに、糸の染つて居る所がある。この世の中は斯の如くにして生活するのであるが、人生の果報が終つて去つて今度後の世の生活に移る時に、人間一生の間にやつて居る仕事が惡かつたならば、その次はモット〳〵つまらぬ生活に墮ちて行くのである。さうして一旦墮ちかけたらモウなか〳〵再び人間に歸ることは出來ない。自分の精神を常に強く刺戟して居るのは實にその點である、一たび墮ちかけたら後へ戻れないといふことが實に恐しい事だと思ふ。人間の中でも墮落を始めて牢に行くやうな者は、免囚保護事業などで如何に骨を折つて世話をしても、本當に改心する者は殆ど絕無である、改心したやうに見えても、それはたゞ女房を貰つたり、資本金でも出して貰つて都合の好い時だけ改心したやうな顏をして居る、少し工合が惡くなればヂキに不平が昂じて行つて、又舊の如く强盜になつてしまふ。殆ど本質的には治らないと言つて宜いくらいのものである、治るべきものナンだけれども、人間が一旦惡くなりかけるとなか〳〵治らぬ。不良少年でも十八歲までは感化が出來るけれども、十八歲を越せばモウ感化院ではこれを受付ないのであつて、到底治らぬといふことになる譯である。それは白い糸ならどんな色にでも染まるけれども、十八歲から先になつてしまつたらモウ紺の糸に染め切つたやうなもので、これを石鹼で洗うても、曹達を入れて煮出しても、元の白い糸にはならぬやうなものである。人間でもさうであつて、これが餓鬼の方へ行くとか、畜生の方へ行くとかいふことになつたら、到底再び人間へは出て來られないと思ふ。チヨツト考へても、畜生に墮ちて居てそれから善い事をして人間へ出て來るといふやうな因緣の關係はどうしても考へられない。蛇なら蛇になつたとしたならば、一生涯に蛇が何をするか、蛙を食つたり何かするだけで、蛇が出世して人間まで出て來るといふことはどうも考へられない、少しく上の方に行き居つても、又間違つた事をやつてドサンと墮ちるから、墮ちる方の關係はチヤント幾らでもあるけれども、上る關係といふものは無い。餓鬼へ行つてもその通り、始終腹が減つて居るから他人ばかり恨んで、他人が物を食つて居るのを見れば『おのれッ喰ひついてやらうか』といふやうな邪念が一パイになつて居る、さういふ者が善心にはなれない。人間でも極く貧乏人は根性が拗けてしまつて變な事ばかり考へて居る、況んや餓鬼になつて、晝も夜も腹が空つて居る、それが何十年何百年と積いたならば、迚も人間などに出て來るやうな精神にはなり得ない。それがモウ一つ地獄まで行つて、火の中に放

込まれるとか、熱湯の中に投込まれてヒイ〳〵言つて居る間に、どうして善を積んで人になつて來ることが出來るか。それを考へる時に、この人生に於て善根を積んで、墮ち込まないやうにして置かなかつたならば大變だといふことが、寝て居つても眼が開いて居つても自分の頭腦を刺戟する、年を老つて屋外傳道などをやるのもそれが爲である、ナニも物好でやりはしない、自分は坊さんになつてから今日まで相當働いたつもりであるけれども、併し遺損つたら大變だといふことを考へるのである。

だから先づ人生に於ては、善根功德を積んで下へ墮ちぬやうにせよといふことをお釋迦樣は非常に詳しく說かれて居る。或る坊さんは地獄極樂はたと人を威したものであるなどと言ふけれども、決してそんな譯のものではない。確にお釋迦樣は地獄の苦しみを詳しく說き切れば、お前等は聽いたゞけでも血を吐いて死ぬだらうと言はれて居る、聽いたゞけで血を吐くほどに苦しいものである。日蓮聖人の遺文にも出て居るが、毛血法師といふ人があつた、その人は每日着物を洗濯をした、『あなたはどうしてそんなに着物を洗濯するのですか』と聞くと、『私は宿命通といふものを得て、自分が地獄に墮ちた時の事がわかる、それを考へるといふと恐しくて、毛孔から血が滲んで出る、それで每日着物を洗ふのだ』と言つたといふ、本當に地獄の苦しみを覺えて居つたならば確にその通りであらうと思ふ。大震災の時に火焰の中から逃げて無事に助かつた人などはさういふ事を言つて居る、私の知つて居る坊さんで本所の方に居つたが、鐵道線路を傳うて逃げて行く時分に、火に追はれて、足を燒いたり頭の髮を燒いたりして漸く助かつた人があるが、『その時の事を考へるとモウ慾も得も何もありません』と言つて居る。その位のものであるから、地獄に墮ちた時の事を考へて見たならば、なか〳〵えらい事に逢ひない、兎に角上

にあがつて來られない。人間は幸に上にあがれる位地に居るのであるから、善根を積まうと思へば善を行ひ得る、心のきめ方に依つてどのやうな立派な菩提心をも起し得る位地に居るものであるから、今日心がけて善を積んで行かなければならぬ。

この因果應報の理は、惡い方から考へると實に怖いけれども、善を行うて向上が出來るといふ方に强く自信力を生じて來ると、洵に有難いといふことが能くわかる。『今日も自分はこれだけの事をした、斯ういふ善い事をした』といふことが有難く感ぜられる。それには無論自分の自力だけでは力が足らぬ、危なげの所があるから、そこで他力の佛樣の御力と結んで置いて『一生懸命やりますが、及ばぬ所があつて墮ちかけたら一つ引張つて戴きたい』といふ約束をして、『どうぞ忘れないで置いて下さい』といふことになる。確かりとお釋迦樣と御契約を申上げて置けば宜しい、『宜しい、お前の方から賴まなくても救はうと思つて居るのだ、それだけの善心があれば力の足らぬ所は俺の方から貸してやる、』『どうかお見落しの無いやうに願ひます、』『そんな事は言はぬで宜しい』といふことになつて、そこに安心立命といふものが起つて來る譯ナンである。

斯樣にして吾々人間が向上して行くとか、佛樣に成つて行くとかいふことが難しくないといふ意味合を、佛は徹底して說かれた。人間は表面は煩惱のものであるけれども、その中に立派な佛性があつて、それが伸びて行くのである。佛性といふものは非常な勢ひを有つて居る、緣に觸れゝばそれが成長して行くものである。だから少しも失望することはないといふので、法華經では『十界皆成佛道』と說かれて、どんなものでも皆助かる、一人として成佛せざるものの無しといふことを保證せられた、その中に女人の成佛も現れ、惡人の成佛も保證せられて來た次第である。それで不輕菩薩はあらゆる人を禮拜し

て、『汝等皆な菩薩の道を行じて當に作佛すべきが故に、』心配は無い、キット佛樣に成れるのだから拜んでやると言つて、向上精神を飽くまでも發揮して行つたものが法華經である、その點が又如何にも有難く出來て居る。であるから法華を讀めばそこにこの歡喜の心が起るやうに出來て居る、『歡喜身に充徧せり』と言つて、所謂手の舞ひ足の踏む所を知らないやうな、その愉快なる快潤なる宗教として法華經といふものは起つて居る。それが日蓮聖人に現れて、即ち頭の座に座つても『これ程の悦びを笑へかし』といふやうな工合に、どこ迄も歡喜の精神に滿ちて居られる譯である。

モウ一つは佛樣の方であるが、法華經にはお釋迦樣の尊い譯柄が本當に說かれて居る。そのお釋迦樣の常住不滅で在らせられる事も哲學的の論證に依つて本當に說かれ、壽量品に事細かに敎へられて、我は今日始めて佛に成つた譯ではない、久遠の成道以來衆生濟度に從事して、未だ曾つて暫くも廢しない。さうして我が神通の力は斯ういふものである、敎を說けば自由自在に斯樣に敎を說くことが出來る、又敎に依らずして汝等を神通の力を以て救ふ場合に於ては、秘密の力を現して汝等を救ふことが出來る、又功德を與へて汝等の足らざる所を補ふことも出來る、我には說法の力も、神通の力も、功德の力もあらゆる力を悉く有つて居るから、何なりと足らぬ所は補うて汝等を救うてやる、我の力に依つて一人でも救へない者は無い、『唯だ我一人能く救護を爲す、』我は一人で汝等を救ふところの力餘れるものであるといふことを十分にお說きになつて居る。それで法華經は有難いのである、壽量品はその意味が洵に事細かく示されて居るのである、たゞの宗敎とは違ふ。他の宗敎ではそれがボンヤリして居る譯である、たゞ誓願クラキであつて、阿彌陀樣が斯ういふ願を掛けたといふやうなことであるけれども、壽量品には

さういふ誓願だけではない、如來神通の力を現して、我は斯の如き力を有すといふ意味合を徹底してお說きになつた。その敎の工合が彼等方便のお經や或は佛敎外の宗敎と違つて、世界のすべての宗敎の最高完全の位地を占めて居るものが法華經の壽量品である。

それが日蓮聖人に依つて十分に紹介せられて、『開目鈔』『本尊鈔』等に於て明かにせられた。何とも申し樣の無い結構な有難い佛樣を信じて、この佛樣を念じて南無妙法蓮華經と唱へれば、その中に佛は一切の功德を籠めて與へられる、如來の神通の力がこの妙法蓮華經の五字を通して吾等に下つてをるのである、『釋尊の因行果德の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を讓り與へたゝふ』、斯ういふ意味に於て南無妙法蓮華經は、本佛の廣大なる御力がその儘吾等の上に下つて來るのである。基督敎で言ふ聖靈の感應といふやうな意味は、佛敎に於ては分身と壽量品の本佛が吾等を護つて下さるものであるから、その感應の意味に於て能く考へて見なければならぬ、誰が護つて下されるのかわからぬやうな事ではいかない。感應主といふものは、基督敎では天の神樣の聖靈が吾等を救ふと言ふ、法華經では久遠の本佛が吾等をお守護下さることになるのである。

その意味合は洵に徹底して、日蓮聖人に依つて能く紹介されて居る。日蓮聖人はその歡喜を『最蓮房鈔』に表はされて

『劫初より以來父母主君等の御勘氣を蒙り遠國の島に流罪せられし人々、我等が如く悅び身に餘りたる者よもあらじ、されば我等が居住して一乘を修行せん處は何れの處にても候へ、常寂光の都たるべし、我等が弟子檀那となのらん人は一歩を行かずして天竺の靈山を見、本有の寂光土へ晝夜に往復し給ふ事うれしとも申すばかり

無し」（縮遺一八四）

と書かれて居る。自分はいま佐渡ケ島に流されて居るけれども、少しも苦痛に感じない、悦びの心を以て暮して居る、それは考へて見れば、法華經を信ずる者は別段遠方へ行かないでも、自分の住んで居る處が直ぐに常寂光の都である、一あしも歩まなくともお釈迦様のお在でになるところの霊鷲山に參詣をして居るも同じ事である、眼を閉ぢて信仰に生きれば、坐ながらにしてお釈迦様にお眼に掛ることが出來る。本有の寂光土に晝夜に往復することが出來る。眼を開いて人間のやうな考になつた時には人生に處して居るけれども、一心合掌の信仰に立つた時には、娑婆世界に居ながら寂光の實土に上ることが出來るのである。家庭に居ながら、眼を開ければ家族と共に生きて居るけれども、眼を閉つて掌を合せれば、お釈迦様と共に生活をして居ることになる。それが日蓮聖人の教へられた所であつて、日蓮聖人は佐渡ケ島のやうなあゝいふ不自由な生活の時にも、お釈迦様と共に暮すのだと言つて歡喜に滿ちて居られた、この意味を吾々が能く味つて、暮れ行く空の電の色にも、有明方の月の光にも、如何なる時にもこの尊き御佛が吾々を護つて下されて居る、決して捨てられて居る子供ではない、親の懐ろに抱かれて居る子供である、如何ならん事に出會うても佛様は見捨てなさることはないといふ事を確かりと信じて行くのである。さうして自分には佛性を持つて居る、その佛性の歡喜はこの佛様を信ずる時にぐんぐん伸びて行くのである、日々に南無妙法蓮華經と唱へて信心する間に、佛の力がいよ〳〵加はつて我が佛性は益々眼覺めて上つて行くのである。人間の果報は今日の程度に於て滿足をして、人生を卒つたならばめでたく佛様になつて行くのであるから、少しも惑ふ所は無い、人の努めを爲し、人の生活を營んでわくけれども、心には何の不足も感じて居ない

といふ風に、信念の生活に活きたならばどんな者でも歡喜を感することが出來るのである。

縱ひ不治の病に罹つて一日々々と命が縮んで行く人間でも、その死が迫りつゝある間にやはり信仰の法悦を以て暮すことが出來る。さういふ病氣に罹つたならば、どうしても普通の人生の事を以ては慰めることが出來ない、信仰に生きればさういふ病人もやはり滿足の心に立つことが出來る。現に大阪邊りの肺病療養所に居る熱心なる信者がある、私の所にも時々手紙を寄來すが、それ等の人は信仰に生きて居る爲に、七年も療養所に入院して居るけれども少しも弱つて居ない、却つてこの頃はだん〳〵又快くなつて來たといふことである。又他にもさういふ病氣になつて居つて、スッカリ治つてしまつた人が幾人もある、死んでも宜いといふ覺悟をして居つて、その中に病氣の治る人も出て來る。たゝ天理教や佛立講のやうに、病氣だけ治す〳〵と言うてはいかぬ。人生の果報に滿足の意を表して、縱ひ壯健な者でも何時臨終するかわからぬのであるから、況んや病魔に襲はれたならば死ぬかも知れぬけれども、併しいつ迄も人間といふものは生きて居る譯ではないから、早いか遲いか人生の終りに達するのである、それはそれだけの因緣果報であるから己むを得ぬことなりと諦めを附けて、信心に活きて行かなければならぬのである。結局は同じものである、病氣で死ぬくても、人間年を老つて死んでも、やはり結局は一日々々壽命が縮まつて、最後は臨終に當面しなければならぬ。その場合に信心さへあれば何も嘆くことは無い、常樂我淨の佛身を成就することが出來るのである。

信心の心が強くあれば、現在の無常の生活の中に常住の力の方が強く現れて生る、日蓮聖人も『遷滅無常は昨日の夢、菩根の覺悟は今日の現なるべし』（聖愚問答鈔 縮遺五七七）と言はれたやうに、死んで行くと思つた

我の方はだん〳〵影が薄くなつて、死なない不滅の我を認める事の方が強くなつて來る。だから老人が年取つて行き居るといふのも、佛樣になつて行き居るといふ考の方が強ければ、肉體の方はだん〳〵弱つて行き居るけれども、信仰の方から導き出す佛性の方は將に現れんとして近づきつゝある、チョード冬が終りを告げて春に向つて居るやうなものである、寒いやうであるけれども、春になり居ると考へれば宜い、人間の生活の方からは冬になり居ると思ふけれども、信仰の生活の方からは春を迎へつゝあるといふ歡喜の心があるから、遷滅無常は昨日の夢、菩提の覺悟は今日の現といふ有難い精神に立つことが出來るのである、それが信仰である。

左樣にして心を救ひさへしたならば、心に裕りが出來て來て、その中から前に言ふやうな浮華放縱の弊害も除かれ、輕佻詭激の害も去り、生活の困難も拂はれて、皆喜び勇んで勤勉努力の活動に就き、くだらない贅澤などに心を執はれないで、而も滿足したる生活をすることが出來る。この佛の敎に依つて眞實國民の心を救つたならば、萬事これに依つて成就することが出來る、そこを見通されたのが聖德太子や日蓮聖人のやうな方である。近來の文化はその精神を救ふことを捨てゝ置いて、外部の形の方から、政治經濟で人生を律しようとのみ考へた、その中の極端なものが共產主義のやうになつて、一切を物質の問題で解決せんとするが爲にあゝいふ間違つた觀念に至つたのである。そこまで行かなくても今の一般人といふものはどちらに附いて居るか、佛樣の方に附いて居るか、マルクスの方に附いて居るかと言へば、マルクスの提灯持みたいな事を言つて居るから、それで世の中が混亂するのである。やはりさういふ政治家なり學者なりは一遍裸にして、如來の正法の水を以て洗禮しさへしたならば、世の中は一遍に良くなる譯である。そこに吾々法華行者の責任がある、日蓮聖人に代つて現代を警告して行かなければならぬといふことに就いて、吾々は街頭に立つて法を說くに至つた譯である。

斯くして近き將來には日蓮門下のすべてが眼覺めなければならぬ時が來る、だん〳〵計畫をして居る人もあるけれども、今はあまりボンヤリし過ぎて居る、モウ少し眼を覺さなければならぬ、さうすれば自分等が今やりつゝある事を廣く國民に宣傳することが出來る。兎に角一萬人近くの日蓮門下の坊さんも居るのであるから、少しはやらなければいかぬ、一割やつても千人である、一分やつても百人ではないか。今日の有樣ではあまりボンヤリし過ぎて居る、それは眼覺めざる者である、心の救はれざる者である、形は沙門であるけれども、未だ信仰に入らない未信者である。眞に如來の正法に依つて救はれたならば、如何なる境界に身を置かれても、各自の職業に勤勉努力して行かぬといふことは無い、況んや法師沙門として敎の爲に活動をしないでボンヤリ欠伸をして居るといふやうな事の出來得るものではない、未だ救はれざるものである。だから形はどうあらうとも、この正法を以て敎化して彼等を救濟の中に入れなければならぬと思ふ。幸に皆さんはその先覺者として確かりした信仰を以てやつて頂きたい、末法は俗人の方から先にやつて、だん〳〵坊さんの方を導く時であらうと思ふ、今の世の中は確にさうなつて居る。日蓮聖人のお弟子を見てもさうである、四條金吾とか、富木入道とか、池上宗仲といふやうな人が皆偉かつたのである、坊さんの方にはあまり偉いのは居らなかつた、今の身延が出來て居るのも波木井氏の力、池上が出來て居るのも池上氏の力、中山が出來て居るのも富木氏の力といふやうな譯で、考へて行くと日蓮門下はやはり在俗の人が餘程力を入れてやらなければいけない。皆さんは幸に多年修養訓育せられたのであるから、更に一段と

奮勵して、この正法を以て人の心を救ふといふことが國家社會のあらゆる事業の中に於ては根本の價値有る事であるといふ自覺に立つて、倍々教の爲に盡して頂きたいと思ふのである。（完）

新刊紹介

本多猊下編

聖語錄

菊版半截
携帶至便
定價金貳圓

法華經及御遺文全般に亘り組織的に其樞要を彙類され布教にも信仰にも無二の寶典として僧俗の間に尊重されたる聖語は久數絶版の處今回改訂版として新裝し京都平樂寺書店より發兌された事は最も渇乏を充すに足る、此際當所にて特に定價の一割引を以て貴需に應ず。

東京市外南品川妙國寺内
統一誌發行所
振替東京五一〇七一番

來る四月十一日より十三日に至る三日間修行

大法會

一、國禱會法要
一、祠堂施主祖先靈法要
一、教學財團翼賛員祖先靈法要
一、立正結社々員祖先靈法要

▲毎日（午前一時　午後七時）法要
▲十一、十二日（午前三時　午後七時）說敎（管長井村大僧正）講演（外全國布敎師）出演
▲十三日午後七時　顯本健兒會大會

右相營候條繰合御參詣被下度此段御案内申上候也

追而準備之都合も有之候に付御參詣の方は四月五日迄に御通知有之度候

京都寺町二條下る（電車河原町二條下車）

總本山　妙滿寺

法要部

電話（上）八十六番
振替口座大阪四六二五九番

天風三萬里紀行（其八）

小林日種

八、青島より天津

五月十三日

今日は珍らしく朝から雨だつた。出發以來雨らしいものに打つかつたのは大邱で一回きり、久し振りの雨は寔に物懷かしい。

然し内地の雨とは非常にその趣が變つてゐる。内地の雨は概して線が細かく、春雨にしても、時雨にしても、情趣があり、暖味があり、そして未練深い處があるが、こちらの雨は線が太く、從つて『情趣』に對しては『意志』であり『莊嚴』であり、内地の雨の『暖』に對しては『冷』であり、『未練深さ』に對しては『粗暴』であり『氣まぐれ』である。夕立のやうに屋根を打拔く程に降りに降つてるかと思ふと、小降になり、小降かと思ふと盆を覆して降つて來る、『盆を覆す』と云ふ言葉は支那人の考へた警喩ではあるが、かうした大陸氣候に接してみると、只單に支那人の形容澤山とばかり蔑視されなくなる。いや其處に盡きせぬ味があるやうである。

そして朝鮮でも滿洲でも此のあたりでも、皆雨具と云ふものを大抵所持してゐない。それでも苦力は降られながら平氣で歩いてゐるが、内地人は概ね降つてる間家居してゐるさうだ。その故か有らぬか今日は訪客も無く、一日のんびりした氣分で讀書した。

五月十四日

日光が眼を射るやうな好天氣である。裕からセルへ衣更えをした。濟南事件以來、警備の任に就いてゐた我が駐屯軍が撤兵するので、それの送別會が青島神社で催ほされた。それに一寸出席した後、午後三時、汽艇に乘じて軍艦對馬に赴いた。松本艦長は

立派な人であつた、野田中佐は親切な人で有つた。アメリカへ赴く希望有る旨を語つたらば早速、紹介狀を澤山賜はつたるは殊に感謝に堪えなかつた。

『軍人精神の發揚』の題下に慰問の講演を爲し終つて將校食堂に於て晩餐の饗應に預り乍ら種々歡語した。

今日は亡父の命日とて歸來、佛前で讀經した。父は私の今の年三十二歳で死去したのであつた。感慨のいとゞ切なるものが有つて胸の痛くなるを覺えた。

五月十五日

淨土宗と曹洞宗の布教所主任二師の來訪を受けた。青嶋は各宗の折合が寔によろしく、好もしき事だと思つた。

夜の講演は各宗佛教團の主催の許に曹洞宗布教所に於て開かれた。當番幹事青木禪海師の開會之辭有りたる後「佛教の三大思潮」と題して約二時間餘語つた。團員諸師が全部出席して下されたるは、年若き遊子に一入の感激を與えた。

五月十六日

市中は撤兵騒ぎで、ごつた返してゐて、道でも家でも兵隊で一杯である。講演をするによかりさうな場所は悉く忠良なる我が軍人の占領する所である。

夕方北海興で催ほされた、余の慰勞會に臨んだ、入口に大きな赤い行燈がぶら下つてゐて、油臭い匂ひや太蒜の香が鼻を打つてくる。

總勢十五人、食卓に付いたが、何しろ隣室なる我が忠良なる軍人が、床も崩れ、柱も襞けよとばかりに放歌高吟、止む時がないので、言語と云ふものが一切通用しない。

仕方がないから、挨拶も謝辞も一切抜きにして、象牙の長い箸を突出して、てんでに平皿ものや丼物を無性に摘んだ。

布糊みたやうなものは、献立を見ると鳳尾魚翅とある、鱶の鰭ださうだ。鹽肯とあるは山鹽に漬けた家鴨の卵である、

糖串といふのは小さい林檎のやうな果物に蜜を掛けて串刺しにした赤團子である。まだ〳〵珍味は澤山有つたが、それは略す。

五月十七日

朝、吉田氏が見えられ、東洋一と云はれてゐる屠場を案内しやうと云はれるので喜んで出掛けた。本屠場は委しくは青島宰畜股份有限公司と云ふので、元獨逸の設立したものであり、現在は、株式總額銀四拾萬元を貳萬株に分ち、永遠に支那側株式百分の五十四、日本側株式百分の四十六とせる日支合辨會社の組織になつてゐる。

多い時は一日千頭を屠殺すると云ふが、方法は打釘式で、釘のやうなものを額に打ち込んで殺すのである。幸か不幸か今日は屠殺日でない檢査日だとかでその實況を見る事を得なかつたが、掃除が行きとゞいてゐて（檢査日のせいであるかも知れぬ）なまぐさい匂ひが少しもしないのに好感が持てた。

案内の及川君は

「何しろ食料品ですから清潔の上にも清潔にする事にしてゐます」と說明した。考へてみれば食料に相違ないが此の場合食料品の詞が何となく耳にこだわつて、すぐはぬやうな氣がした。

午後からの時間は明日は天根に向ふのでその準備に費した。

五月十八日

早朝から佛教團の諸師、信徒の人々、有志知己等多數の來訪を受けた。且つ妙心寺の細川禪英師からは同窓の故を以て殊に種々なる御世話を賜はつたるは感謝に堪えなかつた、更に特筆すべきは大橋師令夫人の物和らかな態度である、大橋師の御好意は申す迄もない事だが、御家族の方の御芳情は特に遊子をして感激せしめるものがあつた。

本堂の前に整列して一同紀念の撮影を爲したる後、皆樣の御見送りを受けて埠頭に赴き、盛京丸に投じた。船の進路としては、上海へ行くのが順なのに、天津では後戻りする格好である、一等船客としては、天津の製絲會社へ榮轉して赴任すると云ふ。青島から乘つた國岡寅市氏夫妻と令息の一行の外には私だけである。淋しくもあるが、讀書思索を念とする遊子には非常な氣安さが感せられた。

五月十九日

午後、船長志水清逸氏の室に請ぜられ、快談に時を忘れる。夕食を共にしてから、望まれて紀念の揮毫をした。（以下次號）

記事

教報

○統一本部教戰錄

△一月廿六日(第四日曜)夜六時半同會、午後一時からの同會を夜とし、會場統一閣を本所區太平町一ノ二六、協和會館として本所區及隣接地居住の統一閣員が會合同催する事とした、來會者廿三名、梶木顯正、羽入田眞人、松岡林造、山口智光の諸氏を中心として快談約二時間、初めに勤經最後に聖訓拜讀散會したのは十時であつた。

因に本會を「統一閣本所組」と稱することゝし、世話人に加藤重太郎氏、中村藤吉氏、木田健二氏、松岡林造氏、津川英吉氏の六氏が選出され、毎月第四日曜の夜同所で同催する事と成つた。

△二月二日(第一日曜)午後一時同會、(雪降り)本多稅下少しく御不例の爲欠席依て閣員督俗御寶前に稅下の御全快を祈念し合せて講演會を左の諸師代講同催した「本多稅下の三大法勳」磯部高事氏「嘗れゆへ殿堂」笠義章師「聖德太子の寃を雪ぐ」和賀義見師「曉に蹄り過む」小西日喜師等、東京としては珍らしい雪降の寒い日であつたが來會者六十七名、閉會後も樂しく語り合つて居た。

△同九日(第二日曜)街頭布教(上野忍坂)の算りであつたが折惡しく雨降りで休會。

△同十六日(第三日曜)午後一時同會、(晴天)當日は大聖人御誕生の記念日に相當するので有意義に、と考へて立正安國大講演會と稱して開くことゝした、講師演題次の如し「立正安國論撰述の眞精神」梶木顯正師「軍縮會議と國民の信念」海軍中將佐藤皐藏閣下「大日本國と日蓮聖人」園田日城稅下、尙佐藤中將の發意に依り若槻軍縮全權支援の爲左の決議文を內閣及米國大使、若槻全權、外務大臣、佛英伊國大使に送附のことを決定しそれ〴〵發送した。當日の來會者百五十有餘名。

決議文

1、吾人ハ不戰條約ノ精神ニ基キ各强國ノ一致的軍備縮小ヲ期ス

2、吾人ハ各獨立國家ノ國防權平等ノ主義ニ基キ一國ノ軍備ハ自他共ニ脅威ヲ感セザル程度ノモノタラシムルヲ期ス

之ガ爲特ニ米國ガ多數巡洋艦ヲ新造シテ盛ニ行ハントスル軍備擴張ヲ排ス

3、帝國ノ要求スル所ハ帝國ノ國防上最小限度ナルヲ以テ苟モ之ガ削減ヲ容サズ之ヲ貫徹セシムル爲ニハ會議ノ決裂モ尙之ヲ辭セザルノ決意ヲ有ス

右決議ス

昭和五年二月十六日
若槻軍縮全權國民後援會
(以上梶木義)

千葉教信

○十一月十九日中野本城寺にて
法華經講話 一 高貫賢龍師
○十二月十九日同所にて
法華經講話 二 高貫賢龍師
○二月十一日、中野本城寺にて建國祭奉行左の講演あり白井青年閣員及本城寺信徒多數參列して莊嚴なる式典を執行せり。
開會の辭 高貫 山主
國難打開の道 小島浩明師
○二月十九日例會
法華經講話 高貫賢龍師

大阪教報

○一月十二日堂岡寺にて新年初講京藤山主導師の下に國綱會を虔修し終て講演に移り「佛教徒と禁酒問題」山本氏、「飲酒と犯罪」京藤師「佛教徒の生活」川崎本山部長講演後新年會席上德永木宮兩民一の所感演說ありて頗る盛會たりき。○二十二日同寺にて「十王讃歎抄に就て」大泉師、「三種の教相」和井田氏。○二十三日高橋宅にて謝恩會講演「正しき信心」京藤師。○二十五日蜂谷宅にて篤信會講演「弘仁時代の佛像に就て」吉村氏、「人信の動機」伴少佐、「信は道の元」京藤師、「力の信仰」

能仁樓大會正。○二十六日刀根山病院にて立正會講演「佛教の卓越せる所以」京藤師。○二月二日友廣宅にて「身讀法華」大川師、「日蓮主義者の使命」有田師。○六日上田宅にて「心の飾り」京藤師、何れも盛會多大の効果を奏せり。

伊勢教報

△一月五日午後四時より四日市安樂寺に於て國綱會及び新年宴會、田久保山主の國綱法要の後新年宴會を開く追分教會所の檀徒等も多數出席し三十餘名の盛會なり。

△一月八日鵜川原村川合宅にて講話「立正大師の主張」田久保本誓師。

△一月十二日夜追分教會所にて橋妙堂師を聘して日蓮聖人二代記浪花節を開催す大盛會也。

△一月十三日夜安樂寺に於て婦人會を兼ねて「藝術傳道の夕」を催す、田久保師開會の辭に次で筑前琵琶「龍の口」小林盛水師次に日蓮聖人浪花節長講二席橋妙堂師あり、滿堂の聽衆を感動せしめたり。

△二月四日鵜川原村服部宅にて御會式法要後「日蓮上人信仰の體系」田久保師。

△二月十二日夜安樂寺婦人會田久保山主以上何れも信仰的氣分漲れる會合なりき。

廣島、吳、教信

一月一日、廣島 本願寺、國綱會
年頭の覺悟 紀野日事師
一月一日午前六時、吳 立正會館にて國綱會
本年の爲すべき仕事 山岡俊顯師
一月九日、廣島 世良氏宅にて
法悅の境地 紀野日事師
一月十二日午後二時、廣島 妙詠寺
國綱會と立正蓮光會並に妙詠婦人會聯合の新年宴會催す、紀野、山岡兩師列席。
親の子を捨てざる心 山岡俊顯師
餘興として若井社中少女連中の生田流琴合奏あり、五時散會を宣して散會。
一月十三日午後一時半、廣島 本願寺にて
婦人會新年宴會講話
信念生活の妙味 紀野日事師
報恩感謝の生活 山岡俊顯師
餘興、琴尺八合奏
一月十三日午後七時、吳 立正會館
護法婦人會と立正安國會聯合の新年宴會並に講演
醒めよ人々 島田惠一師
教理進出と受難の試練 紀野日事師
挨拶 山岡俊顯師
講演後階下大廣間に於て新年宴會を開く來會者六十五名。
一月十六日午後七時、宇品 立正閣
釋尊の大慈悲 山岡俊顯師
一月十九日午後一時半より、立正會館
合理化せる佛教 山岡俊顯師
我が國體と立正大師 海軍中將 佐藤鐵太郎閣下
一月廿二日、廣島國泰寺町 平野氏宅家庭講話
宗教は平凡な慰めか? 島田惠一師
一月廿五日午後六時、吳 立正會館、郵便局員報德會
挨拶 吳郵便局長 三原七時氏
國家と宗教 山岡俊顯師
一月廿七日午後七時、吳市 立正會館
他力か自力か 山岡俊顯師
一月廿七日夜、廣島 妙詠寺、立正蓮光會
能滅衆生罪の歌 島田惠一師
一月廿八日夜、廣島 本願寺
右左傾の偏傾道德を救めて、四恩調整の大道を樂む 紀野日事師
法悅の妙信 橋本日厚師

金澤教報

○館道講話 一月六七の兩日金澤、津幡間驛員のために。
罪を追ひ歩く者 能仁一十師
○佛教講演 一月八日立正寺にて。
富元會變師
○精神講話 一月十二日本長寺にて修養團金澤支部總會を開き美座上にて。
明き生活へ 泉 大佐
明魂顯現と信仰の力 能仁一十師

○音樂會　一月十五日本願寺にて。　富元會榮師
　蓄音器續講
○立正關講演　一月十九日青年會結人會日曜學校等各團體の新年會を開き遊興等ありて盛會。
　挨拶　飯田嘉吉師
　歳改りて　山本清嗣君
　日蓮上人の新年の言葉　能仁一十師
○工場講話　一月二十二日錦華紡績男女職工千三百名のために。
○修養講話　一月二十五日金澤貯金局にて。
　現代と修養　能仁一十師
○修養講話　一月二十六日小立野にて女子修養團員のために。　能仁一十師
　涙より涙へ
○家庭講話　一月二十九日河合氏宅にて。
　初春を迎えて　能仁一十師

誌料領收

自一月二十一日
至二月二十日

一金貳圓貳拾錢也　愛知縣　戸松あさ殿
一金貳圓貳拾錢也　同　本多庫治殿
一金貳圓貳拾錢也　三重縣　伊東寛殿
一金五圓也　川崎　毛見春吉殿
一金四拾壹錢也　鹿兒島　高田貞彌殿
一金壹圓貳拾錢也　東京府　内倉治吉殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪　守部長之助殿
一金六圓也　札幌　本深隆正殿
一金六圓也　大阪　堂園寺殿
一金九圓也　神戸　熊井本光殿
一金五圓也　島根縣　野上馬吉殿
一金參圓四拾錢也　品川　市川鎌太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　元山府　井上竹次郎殿
一金貳圓貳拾錢也　東京府　鈴木信愛殿
一金貳圓貳拾錢也　鎌倉　野元盛幹殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪　富田清子殿
一金貳圓貳拾錢也　神奈川縣　井上健男殿
一金四圓四拾錢也　靜岡縣　川手海評殿
一金貳圓貳拾錢也　濱松　佐伯有台殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪　友廣アヤ殿
一金貳圓貳拾錢也　新潟縣　高橋大吉殿
一金四拾壹錢也　青森縣　田鎖高太郎殿
一金參圓也　川崎　廣瀬調殿
一金貳圓貳拾錢也　西宮　山本小四郎殿
一金貳圓貳拾錢也　兵庫縣　大崎源一郎殿
一金貳圓貳拾錢也　山梨縣　加茂日養殿
一金五圓也　靜岡縣　石井智明殿
一金貳圓貳拾錢也　愛知縣　藤平惣助殿
一金壹圓貳拾錢也　大阪　福井治三郎殿
一金四圓四拾錢也　久留米　中原通應殿
一金貳圓貳拾錢也　東京府　中村喜市殿
一金貳圓貳拾錢也　名古屋　吉田榮藏殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪府　小池芳堆殿
一金貳圓二十錢也　山形縣　中村なか殿
一金四圓四拾錢也　同　遠藤貞次郎殿
一金二圓二十錢也　新潟縣　妙蓮寺殿
一金壹圓二十錢也　山梨縣　杉野悦郎殿
一金二圓二十錢也　滋賀縣　林田芳太郎殿
一金二圓二十錢也　兵庫縣　岸邦太郎殿
一金四拾錢也　宇都宮　齋藤愈十郎殿
一金二圓二十錢也　釜山　天崎地明會殿
一金二圓二十錢也　東京府　濱中茂富殿
一金二圓二十錢也　千葉　伊藤德次殿
一金參圓也　福井縣　岩本初造殿
一金四拾錢也　大阪　小林源一郎殿
一金二圓四十錢也　品川　竹下亀太郎殿

右雜有入帳仕候也

統一會計

國民教養講座案内

時代の趨勢に鑑み知法思國會は其事業の一として今回國民教養講座を左の通り開催す。

一日時、自三月　至七月
　毎月第二第四日曜日午後一時三十分——四時
一會場、淺草區北清島町統一閣
一科目講師、(三月九日及廿三日)
　一國防に關する信念と理解
　　海軍中將　佐藤鐵太郎氏
　一日本の繁榮策と産業の合理化
　　マスターオブアーツ　松野喜内氏
一聽講料、全科金貳圓五拾錢　一科金參拾錢
　但し本會員は貳圓
昭和五年三月

知法思國會

御知友御勧誘御來聽願上申候

本多猊下の三大名著

法華經要義

四六判　六百數十頁
總振假名付
定價　金參圓

法華經の教義を整束し極めて平易懇切に講述せられ、今回特に賢天賢、供臺賢、空前の好著なり。

日蓮主義の心髓

四六判三百五十餘頁
總振假名付
定價　金壹圓八十錢

法華經要義の姉妹篇なり、日蓮主義の精髓を領得せんと欲する者の必須缺くべからざる良書なり。

日蓮主義精要

四六判　七百餘頁
總振假名付
定價　金參圓五十錢

十二篇に分類し教義信條の整束結を懇說せるもの、誰人にも易々として理解の金鍵を與へらる、空前の指針、大燈明の賞讃あり。

「教」發行所

統一定價	
一冊	金貳拾錢
半ヶ年	金壹圓貳拾錢
一ヶ年	金貳圓貳拾錢
送料共	送料五厘
送料共	前金之事

統一廣告料	
表紙一頁	金貳拾圓
半頁	金拾五圓
四分一頁	金九圓
	前金之事

昭和五年二月廿四日印刷納本
昭和五年三月一日發行（第四百二十號）

神奈川縣橫濱市磯子區磯子町廣地一四八
編輯兼發行人　磯部滿事
印刷人　鈴木日雄
印刷所　東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地　都印刷所　電話高輪六〇二四番
發行所　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地　統一發行所　振替東京五一〇七一番

不許複製

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

統一

目次

本感應妙を信じて……本多日生
天風三萬里紀行（其九）……小林日種
常樂院日經上人御消息……
記事……
○北米の野口上人の通信
○各地教報
○護法護國
○誌料領收

第三十五年四月號